

中国文献の勉強

稲垣 勲

現在中国が出している学術雑誌約 70 種のうち薬学関係は化学学報、化学通報、中国科学*、中華医学雑誌*（中草药の臨床報告がよく出る）、植物学報などである。永らく中絶していた薬学学報も今年から出るようである。

* には英文誌もあるが、中文誌は漢字ばかりでこれが誠に読みにくい。化合物名、術語、その他が日本のそれと非常に違い、また簡体字が次々と増加しつつあるからである。日本人は欧米の文献と情報さえ調べていれば学術の進歩には遅れないだろうが、中国の医薬学には 2000 年以上の独特の歴史がある。現在日本の薬学の水準は非常に高いが、中国には我々がもっと学ばねばならぬものが数多くあるのではないか？隣国の文献が満足に読めないというのは我々の大きな手落ちではないのか？

単行本で今出ている無機、有機などの化学書はまだ日本の高校教科書程度だが、生薬書は本場だけに優れた書籍がいくつかある。少し古いが約材学 1 巻とくに中药志 4 巻は名著である。中国薬学大辞典上下は充実しているが古過ぎて誤りが多い。新しく中草药学 3 巻と四川中药志 10 巻が出る。各地方の図譜入中草药～薬物志は診療所で赤脚医生用らしいが草薬草百種を載せている。日本でいう漢方薬は数百種で桁はずれに多い。近來の傑作は江蘇新医学院編中薬大辞典上下と付篇の 3 巻で、本文 2754 頁、5767 品目（同一基原でも用部により分載）、各品目に異名、基原、性状、成分、薬理、用途、処方、古今論説適用、文献等が詳記され正に 20 世紀の新本草綱目といってよい（香港版が日本でも買える）。林啓寿編中草药成分化学は 876 頁、中国特有植物の成分の記述もあり、NMR（核磁共振）、MS（質譜）、生合成（正源途径）も書いてある。陳新謙編新編薬物学も洋薬と中草药を豊富に収載した好著である。なお中国薬典（薬局方）の新版は一応全文が完了して現在各省で検討中だそうだから今年中に出版される可能性がある。

中国の化学辞典（どれも英漢辞典）には薛徳炯編英漢化学辞典（Ⅰ）、化学化工名詞彙編（Ⅱ）、海氏有機化合物辞典 4 巻（Ⅲ）がる。Ⅰは語数 8 万、解説はなく無味乾燥だが付録の無機有機化学物質系統命名原則が好い。これは IUPAC 命名規約の漢訳ではなく中国式命名法の草案で、漢字の化学名を読解するための鍵である。Ⅲは HEILBRON の全訳で上海薬物研究所の先生は推奨していたが、我々にとって重宝な辞典とはいえない。

日本の中日辞典はここ数年間に何種か出たが、これだけでは専門書は読みこなせない。愛知大学編中日大辞典は語数 13 万という大著で薬品、植物、生薬、それらの異名まで多数収載され群を抜いているが、誠に惜しいことに専門語に誤りが多い（目下改訂作業進行中）。最近山田編日中英化学用語辞典（Ⅳ）と田村・白鳥編中英日化学用語辞典（Ⅴ）

が出て、お蔭で中国式化学名が大部解りやすくなった。ただしⅣは中国名の発音が分からないと引けないのが甚だ不便である。Ⅴは字画、発音、日英から引けて好著だが、両書とも薬学用には少し物足りない。

中国の薬学文献を読むための主冊か詞典があってもよい筈だと前から考えていた。6年前大学を定年退職したのを機会にそんなものを作ってみようかと独りひそかに心を決めて、ずっと調査に専念してきた。たまたま前記中日大辞典の改訂に少しばかり参与させていただき、これが実にいい勉強になったが、化学と生薬だけが薬学ではない。薬剤、薬理、生物、中医学基礎（これを知らないと中草药は分らない）等、等、いろんな領域がある。広汎な薬学用語を網羅しようとしたらすごく膨大なものになるだろうし、到底独りでやれる仕事ではない。うんざりせざるを得ない。しかし日本の薬学研究者はみんな英独（中には佛、露、中国）の文献を大辞典など使わずに楽に読んでいる。専門分野の外国文献を読むだけなら必ずしも語学の達人や生字引になるを要しない。こう考えると一応の詞典ぐらいなら何とかできそうな気もする。帯にもタスキにもならぬようなものを作ろうとは思わない。未完成は覚悟の上だから、気楽に慢慢地にこつこつとカードの作成を続けている。ただ残念ながら既に 69 歳、もう先が見えている。もし恍惚化重篤の気配が出たら、その時はどなたか同じような仕事を考えておられる篤志家かグループに、書きなぐった？万枚のカードと少しばかりの書齋とともに、あっさりバトンをお渡ししよう。それともこんな弱気は出さないで、愚公山を移すという中国の故事もあることだから、少々欲ばってあと 15 年くらいマイウェイを歩き続けることにしましょうか？

注 日本薬学会 ファルマシア vol. 15, No. 4, 1979

书讯二则

(一) 爱知大学编《中日大辞典》修订工作已告完毕，修订目前在排版校对中，预计明年4月出版。自铃木柾郎教授逝世以后，主持修订工作的是今泉润太郎教授。

(二) 早稻田大学森田良行教授著深受广大读者欢迎的《基础日本語》(角川小辞典丛书) 1, 2, 3册、已出齐，它的合订本不久即可问世。

注 <日语学习>总14号 1985年4月

今春で改訂作業終わる 中日大辞典

五十九年早々に発刊

愛大 客観的事実を基調に

愛知大学（久曾神昇学長）の中日大辞典編纂（へんさん）処（編集委員長・今泉潤太郎教授）は、同辞典の第一回脱稿以来、十五年間にわたって進めてきた改訂作業をことし三月いっぱいまで終え、終訂版の印刷に入ることを決めた。終訂版は、第八版で一万部を印刷、五十九年早々に発刊にこぎつけた意向である。

十四万語を収録

同辞典は昭和二十九年末、日中友好協会を通じて中国人民保衛世界和平委員会から日本人に寄贈される形で、中国にあつた上海の東亜同文書院大学の中日辞典編纂室が集めた中日辞典の単語カード十四万枚が返還され、この単語カードを基礎に、十三年間に及ぶ困難な作業をへて昭和四十三年に初版が刊行された。

同辞典の刊行は、中国で文化大革命が始まったばかりのころで、中国社会の価値観が大きく揺れ動いていた。その語、文化大革命は反革命のラク印を押されて終わりを告げ、四人組事件をへて、いま、四つの近代化”路線を歩む中国社会は、あらゆる面で一八〇度の方向転換をしている。

こうした中国社会の大きな変革の嵐は、言葉の解釈にも変革をもたらしたが、同辞典は、編集の基本方針として「事実を客観的にとらえる」という姿勢を貫いてきたために、収録した一三万余語にわたって基本的な変更はなく、初版刊行以来、十四年余をへた今日でも中国はもちろん、各国の中国関係の研究者たちから高い評価を得ている。

今泉教授は、昭和四十八年、文化大革命の最中に辞典編集の中心となっていた故鈴木攄郎名誉教授を団長に、学術訪中団を組織して辞典改訂のため訪中した。このとき、訪問先で辞典に対する評価を聞くと同時に、中国社会事情から、“革命の意義を解説してない”との批判も受けた。しかし、鈴木団長は、批判は素直に受けとめるが、客観的事実をとらえる基本方針を変えるつもりはない”と断言したことをいまでも覚えている。十数年をへた今日、その姿勢に誤りのなかったことが証明されたようだ”と話している。同辞典の改訂作業は、一昨年一月に他界した故鈴木名誉教授を中心に今泉教授、荒川清秀助教授、黄異客員教授、白井敬介講師、陶山信男助教授、高臨渡教授ら同大学中国語、中国文学関係教授陣をはじめとするスタッフのほか、交換教授の中国北京語言学院劉青然教授など、多数の長年にわたる膨大な作業の集大成として、ことし三月をメドに最終脱稿を行い、印刷を開始することになった。

この改訂作業の結果、同辞典は単語数で約二〇%増の十四万語をこえ、ページ数も現在の本文二千^六から二千四百余^六になるものとみられている。

今泉教授は「単語は、主に中華民国以降の近代中国から現代中国の言葉を中心に、明代の話し言葉である『白話小説』の類からも単語を拾っているほか古典からも単語を収録しており、伝統的中國を知るうえで役立つはず。単語の解釈、用例は文化大革命を柱に中国社会の中で大きな変革があったものの、現在は、これがもとに戻った感じだ。ただ、文化大革命のときに始まった文字改革の簡体字の扱いがどうなるかだがそれも

(以下14字不明) うだから印刷開始に間に合うと思う」と話している。

中国語辞典は、昨年十二月に大東文化大学の香坂順一教授が「現代中日辞典」(光生館)を発売しており、この辞典が約十三万語を収録して関係方面に話題をまいているが、内容的には中日大辞典にいま一步といったところのようだ。

ともあれ、同辞典は初版発行以来、中国国内をはじめ、ヨーロッパやアメリカ、オーストラリアなど中国関係研究機関から高い評価を得ており、同大学からの研究留学生らが各国で「あの中日大辞典を発行した大学ですね」と聞かれるほど関心を集めているだけに、終訂版発刊への各方面の期待は大きい。

〔注〕東海日日新聞 一九八二年一月所載。

一段とビッグに

秋に「増改訂版」発行

愛知大学（浜田稔学長）は今年十一月十五日の創立記念日にあわせて、中日大辞典の増改訂版を発行する準備を進めている。同辞典は創立二十周年記念事業として四十三年二月に初版を発行して以来、八版を重ね延べ十萬冊が、国内はもとより、中国をはじめ世界各国で愛用されている。しかし、中国は文化大革命以後、近代化を目ざして大きく変化し、同辞典の内容に全面的な改訂が望まれていた。

中日大辞典の増改訂版は、収録している十三万七千余語のうち約三割を新しい用語に変えるほか、経済関係を中心に約二万語を追加、全体で十五万語を収録、現在の二千^六から二千五百^六余とするなど世界で最も大きな語学辞典のひとつになる。

中国は、一九七六年の文化大革命以後、内政も落ちつき経済発展を目ざした四つの近代化を推進、用語も文革中と比べると大幅に変化している。出版物も自然科学をはじめ政治、経済など全般にわたって数多く出まわるようになった。

中日大辞典は、文化大革命の影響で改訂を重ねたこともあり、現在の中国の国語事情に合わない用語も目立っていたため、五十年（一九七五年）に「中日大辞典編纂所」を再開、十年をついやして全面改訂に取り組んできた。

改訂作業は、昨年三月に脱稿、最終の校正に入っていたもので、今年夏までには印刷に入り、十一月には発行の予定。

同辞典の改訂作業にあたっている今泉潤太郎教授は「一口に十五万語というが、気の遠くなる仕事。私の視力もかなり落ちてしまい、虫メガネを使わなければよく見えなくなった。だから、今度初めて“拡大版”もつくりたいと考えている。」と話している。

中日大辞典は戦前、同大学の前身である中国上海の東亜同文書院大学時代に編集が計画され、故鈴木沢郎名誉教授らを中心に十数年をかけて約十四万枚にのぼる単語カードを作成した。しかし、敗戦でこの単語カードは中国側に没収され、中日大辞典の編集計画は挫折した。

戦後、中国側の理解も得られ、二十八年夏に返還されたのを機会に、鈴木名誉教授を中心に今泉教授らも加わって三十年四月から、編集が行われた。

完成までに十三年の歳月をついやし、四十三年二月に初版を発行、世界の中国研究者の賞賛を受けた。

中国で高い評価を受ける

同辞典は、中国国内での評価は高く、同大学に研修生として来日している大連外国語大学の日本語講師の阮守勤さんも「中国の大学では中日大辞典は、多くの人に使われて

います。この辞典と愛知大学を知らない人は「いません」と話しており、今度の増改訂版に熱い期待を寄せている。

〔注〕 東海日日新聞 一九八五年一月一日所載。

愛知大学が新たに3校と協定 学術交流の成果吸収へ正念場

第二次大戦後、上海の東亜同文書院大学などを母体に誕生した愛知県豊橋市の愛知大学（浜田稔校長）は、中国との結びつきの強さで知られているが、従来北京語言学院、南開大学（天津）の二校だった中国の学術・教育交流協定校を今年四月から五校に増やすことになった。中国側の申し込みに応じたもので、これにより交流がますます盛んになることが期待できる。ただ、これまで「平等互惠」といいながら、どちらかといえば「中国側にプラスが大きい交流」の色合いが濃かったといわれるだけに、愛大側が交流の成果をどう吸収していくか、正念場はむしろこれからだ。

「とにかく中国の方がずつと熱心で。我々は受け身でした。日本滞在中にできるだけたくさんのもを利用し、吸収しようという意欲は大変なものです——中国との交流に携わってきた今泉潤太郎教養部教授はこう言う。

二校と協定を結んだ昭和五十五年以来、これまでに同大学が中国から受け入れた交換教員や研修生は二十二人。いずれも四、五十歳代の日本語や日本文学、日本史などの中堅研究者で、一二年間滞日、ナマの話し言葉に接して「たみ水練」だった日本語の軌道修正を図るとともに、それぞれが自分の関心によって「江戸期の日本文学」「日本現代史」などのテーマで研究を進める。もちろん、愛大の学生に対して中国語を教えるケースもあるが、日本から何を吸収するかに留学の重点があるのは間違いない。

一方、愛大から中国へ派遣される教員は自分の研究よりも、むしろ教育が中心だそうで、六十年代に南開大学へ派遣する四人も、一カ月ずつリレー方式で上古から現代までの日本文学史を集中講義する計画だという。日本人学生のための中国語の教科書はまだ編集の計画段階だが、中国入学生のための日本語教科書は愛大の教員が中国滞在中に書き上げるなど、教材面でも日本から中国へのサービスが先行している。

だから、今泉教授も「派遣教員に比べて受け入れる人数はずつと多いし、研究内容のやりとりでいえば我々の“出超”です」といささかアンバランスな交流ぶりを認める。四月から新たに北京第二外国語学院、上海外国語学院、復旦大学（上海）の三校が学術・教養交流協定校になり、人や図書などの行き来がより盛んになれば、費用もその分余計にかかる。一私大が損得勘定も考えながらどこまで交流を拡大できるか、予算にも限りがあるだけに難しい。

愛知大学は四十三年に中日大辞典を刊行、現在その改訂作業を急いでいる。特に自然科学の分野ではわが国に中国語に詳しい学者が少ないため、中国人研究者の協力は不可欠だ。中国人教師による唐詩の集中講義なども魅力がある。私大ベースの国際交流のヒナ型の一つとして、愛知大学の今後は注目される。

完成近づく増改訂版

六年がかりの作業

来年四月に刊行予定

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典の増改訂版は五十一年の改訂作業着手以来、満六年がかりの作業を終えて来年四月刊行の運びとなった。増改訂された中日大辞典は、従来の同辞典と同じ大きさのA5判だが、収録単語は一万語以上多い十四万余語、本文二六二五頁に及ぶ国内では最大の中日辞典となる。

国内で最大 十四万余語を収録

同辞典の増改訂作業は、同大学中日辞典編纂（さん）処（編集委員長・今泉潤太郎教授）で続けられていたもので最終の第五校正を今月中に完了し二月から凸版印刷（東京）で印刷に入る。中国の文化大革命、四人組の時代が終わり四つの近代化が始まった一九七八年（昭和五十三年）以降、中国国内でも本格的に出版物が出回るようになり、中国辞典も数多く出版され、同辞典の増改訂にせまられていたことから、一九八〇年（五十五年）四月に同編纂処が正式に発足、鈴木沢郎名誉教授を中心に、改訂作業がスタートした。

当初、四年前にすべての増改訂作業を終え、一九八四年（五十九年）春には刊行の予定だったが、五十七年一月に鈴木名誉教授が他界したこともあって刊行が遅れていた。

しかし、同大学の学術・教育交流の協定校の中国北京語言学院の交換教員、研修生はじめ中国人スタッフの協力と後を引き継いだ今泉教授らの努力で、初版以来十八年ぶりに内容を一新した同辞典が刊行された。

同辞典は、愛大の前身で中国の上海にあった東亜同文書院時代に鈴木名誉教授（当時は同文書院教授）らが「中国語の本格的な辞典を」と単語カードの収集をはじめたのがはじまり。当時、中国語の「国語辞典」はなく、中国語を学ぶ各国の人たちを悩ませていた。本格的な中国語辞典の出現は一九三六年（昭和十一年）で、日本でも一九三五年（同十年）に中国語辞典が出された。しかし、内容的には未完成の部分が多かったことから、常時十数人の日中両国の中国語教師を擁していた同書院で中日辞典の編集を手がけることになった。このとき、集められた単語カードは十四万枚にのぼった。語数で七〇八万語だったというが、終戦のさい、同カードは中国政府に接収され、中日辞典の編集は中座した。

戦後、一九五三年（同二十七年）に当時の本間喜一学長（元同文書院大学長）から、中国側に同カードの返還願いを出し、翌年九月日中友好協会を通して同大学にゆだねられた。

この単語カードを基に十三年間に及ぶ困難な作業を経て四十三年に中日辞典初版が刊行された。しかし、当時は中国の文化大革命がはじまったばかりで激しい文革批判の中、同辞典も一部内容の手直しを余儀なくされた。四十八年、愛大は辞典改訂を目的に鈴木教授を団長とする学術訪中団を派遣、訪問先で辞典に対する率直な評価を聞くとともに「革命の意義を解説していない」とする批判に、鈴木団長は「批判は率直に受けるが、客観的事実をとらえる編集の基本方針を変えるつもりはない」と断言したという。このことが今回の増改訂版の一新を容易にした。

今泉教授は「鈴木先生は、辞書は十年ぐらいたつとボケてくる。新しい血を入れなければいけない」と常々話していた。初版以来、小さな改訂を続けたが満足のいく結果が出なかった。このため、鈴木先生は五十三年退職後、辞典の改訂作業に余生をかけられた。その遺志を継いでようやく完成に近づいた」という。

増改訂版は、これまでの辞典の、主に中華民国以降の近代中国から現代中国までの言葉を中心に、宋、明時代の話し言葉である「白話小説」の類からも単語を拾っている。その他、古典からも単語を収録しており、伝統的な中国を知ることができる。四つの近代化以降、中国出版物の増加で中国辞典は数多く出されているが、今回の増改訂では、基本的な単語の一部変更だけにとどまっている。

このため、今泉教授は「中国の辞書づくりの基本に関する論文も多い。単語の発言、字画についてもまだ不確定の部分がある。これらの点を解決するには増改訂では無理。新しい発想で全く初めから辞書をつくり変えなければならないので、今回の増改訂で最後」と話している。

〔注〕東海日日新聞 一九八五年一月一六日所載。

「中日大辞典」の増改訂版 4月発刊

わが国初の本格的中国語―日本語の辞典としてさる四十二年刊行された「中日大辞典」の増改訂作業が豊橋市町畑町の愛知大学内「中日大辞典編さん処」で進められている。現在、最後の校正作業に入り、四月下旬ごろには、東京の「大修館」から出版される。収録語も大幅に増え、国内で最大の日中辞典となる。

同大の母体で、戦前、中国の上海にあった東亜同文書院大学が、中国語の辞典を発行しようとして、昭和九年から十九年まで、カードの作成を進めていたが、カードは終戦で中国側に没収された。

敗戦の混乱も落ち着いた二十八年、東亜同文書院大学最後の学長で、当時の愛大学長だった本間喜一・名誉学長の発案で再び、日中辞典を発行する機運が盛り上がった。このため、国交のなかつた中国にカードの返還を求めたが、断られた。ところが二年後の三十年になって、「中国人民から日本国民へのプレゼント」として、同大に返還された。

しかし、カードが返還された当時、中国語は戦前と大きく変化していた。このため、故鈴木沢郎教授が中心となって、カードを基に十二年がかりで編さん、四十二年によく出版にこぎつけた。本格的な中国語の辞典がなかつた時だけに、画期的な辞典として、注目を浴び、これまでに約七万部が出ている。

その後の中国は、文化大革命などで、さらに文字の略字や内容が違ってきたため、さる五十五年から鈴木教授が中心に増改訂作業を始めた。鈴木教授は志半ばの翌五十六年に亡くなったが、教え子だった今泉潤太郎教授（五三）（豊橋市植田町）が、恩師の遺志を受け継いで作業を進めてきた。

〔注〕 中部讀賣新聞 一九八六年一月三一日

中国人民の感情を尊重して

六年がかかりで進められてきた愛知大学の『中日大辞典』増改訂作業が、同大豊橋校舎にある中日大辞典編纂（さん）処で終盤を迎えている。

「もうすぐ、もうすぐと言って来ましたが、今度こそ本当。四月中旬には出版の見通しです」と中心となって作業に携わっている今泉潤太郎教授（五三）はホッとした顔。

『中日大辞典』は、そもそも愛知大学が戦前中国にあった（前身は東亜同文書院大学等）ころからの“研究遺産”をもとに、昭和四十二年、初版が刊行された。増訂版は、当時の編集委員長だった故鈴木沢郎氏の遺志という。

「翌年、中国・北京へ行って学術的な座談会を行った。その時、非常に歓迎されたけれども、中国人民の感情を尊重してほしい」という意見がでて、手直しの必要を痛感したんですね」

主に歴史観。賊と日本でとらえられたものが、革命だったりする。翻訳は字面の問題だけではない以上、変わりゆく中国への対応は容易でない。この間、文化大革命もあった。

「歴史的な事実は曲げられない。しかし、人民感情に違和感ないように……。ミスの特徴はあるし、まあ、一日に一語のペースでした」

増やした語は二割近く、ページ数は一九五〇から二五七〇に。

着手したころは鈴木沢郎氏も健在で、大体のところは支持されていたものの、中国人スタッフの力を借り、学生アルバイトの協力を得ての地道な作業。中国語が目につけばつい「あれ、辞書にどう載ってたかな」と思うクセがついてしまったとか。

愛知大学版の中日辞典は古典を含む点が貴重。北京で、安価な海賊版が出回るのが悩みだそうだ。

〔注〕中日新聞 一九八六年三月五日夕刊所載。

10 年かけ増訂版が完成

愛大の今泉教授らが心血

愛知大学（豊橋市町畑町一の一・浜田稔学長）が先に発刊した「中日大辞典」の全面的に改訂した「増訂版」をこのほど刊行した。

同大が中国語についての一般語彙（い）はもとより、政経時事から科学技術用語まで、十三万語の熟語を網羅した「中日大辞典」が初めて世に出たのは四十三年二月。構想から刊行まで十三年間を要した大辞典は高い評価を受けた。改訂版発刊準備から印刷まで十年を費やし完成、収録親字数一万三千、熟語数は十四万語に達し、文字通りの中国語における全分野の総合辞典となる。

五月三十一日、名古屋都ホテルで、出版記念会および、中国国家教育委員会への贈呈式が行われる。

中日大辞典は、二十九年末日中友好協会を通じ、日本に寄贈された旧東亜同文書院大文学製の中国語カード十四万枚が愛知大学に付託。これを基礎に故内山完造日中友好協会理事長、故鈴木沢郎教授、今泉潤太郎教授（五三）が中日大辞典編纂（さん）委員として作製にあたり、四十三年に刊行。当時、中国語に関する辞典としては世界の学会に誇りうる金字塔として高く評価。初版一万部から、七万部のベストセラーとなった。

増訂版の出版は、故鈴木教授、今泉教授、大学専任教員中国人ジャヤーナリスト黄異さん、中国語教員を編さん委員として五十年から業務を再開。五十七年鈴木教授病死以降は、今泉教授がほとんどの作業を手がけ、十五日完成となったもの。

総ページ数二千八百。用字はすべて正確な簡体字、一般語は、科学技術用語、方言、俗語からことわざ、古語まで十四万語を網羅した増訂版は、文字通り今泉教授ら委員の血の汗の結晶から生まれた。

五月開かれる出版記念会および贈呈式、祝賀会では、文部大臣祝辞、

〔注〕東愛知新聞 一九八六年四月所載。

18年の歲月かけ

中日大辞典増改訂版が完成

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典増改訂版は六年がかりの増改訂作業を終えてようやく完成し、今月下旬から全国の書店で一斉に発売される。同辞典は昭和二十九年に中国から、同大学の前身の東亜同文書院大学が集めた中国語の単語カード十四万枚が返還されたことから故鈴木枳郎名誉教授を中心に編集が進められ、四十三年二月に初版本を出した。以来、十八年の歲月をかけて最終版ともいえる増訂改訂版を完成した。

14万語余を収録

今月下旬に全国発売

完成した同辞典の増改訂版は、初版と同じ大きさのA5版だが、収録した単語は約二万語多い十四万語余で中日辞典としては最大。本文二千五百二十二六、さく引百九十六六で、従来の同辞典より本文が訳六百六も増えている。

十四万語余に及ぶ収録単語は、中国の四つの近代化以後の最新語から、政経時事、科学技術用語や方言、諺語、古語まで幅広く、字体も簡体字のほか親文字の見出しには反対（旧字体）、異体字を併記して使いやすい。

中日大辞典はこれまでに七刷まで出され、中国はもとより世界各国の中国研究者の高い評価を得ており、延べ七万部が印刷された。増改訂版は五十五年から本格的な作業に着手、故鈴木名誉教授の遺志を継いで今泉潤太郎教授を中心に十年の歲月をかけて今年一月に完了、印刷に入っていた。

今泉教授は「今は増改訂版の新しい中日大辞典を手にいれたい気持ちでいっぱい。反響も大きく、当初予定より五千部多い一万七千冊が刷られたが、評価は従来の辞典と新しい増改訂版を比較して使ってもらい“充実した”との反応が得られなければなんともいえない」と話しており、喜び半分、不安半分といったところだ。

同辞典の増改訂版は一万七千部の印刷で、二十四日から全国の書店に発送される。このうち千部は五月三十一日に名古屋の都ホテルで開かれる出版記念会の席上、中国国家教育委員会へ寄贈される。

〔注〕中日新聞 一九八六年四月所載。

愛大の中日大辞典

十数年の労苦、増訂版

中国へ千冊寄贈

日本初の本格的な中国語辞典として日中文化交流にも役立った愛知大学の「中日大辞典」の増訂版が出版された。同辞典が出版されて約二十年。同大中日大辞典編纂(さん)処の編纂委員長、今泉潤太郎教授(五三)は、著しい変化をとげる中国社会に対応し、十数年余にわたって増補改訂作業を進めていたもので、コツコツとつづけられた地道な作業の中、一人、二人と他界した老教授も。数多くの人たちの情熱がこもった増訂版に、今泉教授は「再度、日中文化交流に役立ってもらえれば」と話す。二十四日に発売。来月末には千冊を中国・国家教育委員会へ寄贈する。

同大の前身、東亜同文書院(中国・上海)時代からの教授らが中心となり、約十三年の歳月をかけて編集した「中日大辞典」は、昭和四十三年に出版。その豊富な内容は内外から高い評価を得るとともに、日中国交正常化を前に、両国の友好関係にも貢献した。これまでに計七万冊売れている。

増補改訂が進められたきっかけは、中心人物である鈴木沢郎教授(五十七年に病死)をはじめ編集スタッフが訪中し、当地の大学などで専門家と意見を交わしたこと。当時中国を変容させた文化大革命のさ中。教授たちは激しい社会の変化を肌で感じ、それに対応した追加訂正の必要性を実感したという。

五十年、正式に編纂処を再設置。すでに退職している鈴木教授を編集主任に、今泉教授、中国から来た黄異(こう・い)教授ら五人で改訂編集委員会を組み、本格的に取り組み始めた。中国からの訪問学者や研修教員の激励、学生らの手助けもあって、最新の資料を収集、作業は連日連夜、コツコツと進められた。

編纂処(室)は同大本館の一画にある明治時代からの建物。旧軍隊に使用されたせいか天井は高く、照明、暖房などが行き届かない欠点がある。目が悪くなるのは日常茶飯事。高齢教授にとっては厳しい環境だった。この間鈴木教授は他界。ほかにも黄教授の兄で、二年間協力した北京農場機械化学院の黄志明教授らが逝去している。

同大文学部中国文学科を卒業した時から約三十年、一貫して取り組んできた今泉教授は「辞書をつくると目が不自由になったり、人が死ぬということとは本当にあるんですよ。何しろ五年、十年を単位とする仕事だから。でも、日中文化交流に役立つなど『いい仕事だなあ』と思うからこそ続けられた」と振り返る。

「中日大辞典・増訂版」(大修館・六千八百円)は二千八百ページに熟語約十四万語を網羅。従来のものには、やや不足していた動物・植物・医学など理工系の言葉、さらにコンピュータなど新しい技術関係も記述し、俗語も豊富に盛り込んだ。

今泉教授は「いまも中国の変化はめざましい。これからは科学的データに基づく辞書づくりが必要でしょう。でも、よほど気力と体が充実してなければ、もうちょっと……」と話している。

〔注〕毎日新聞 一九八六年四月二五日所載。

師弟二代の執念が実る

わが国初の本格的中国語辞典として、愛知大学（豊橋市、浜田稔学長）から四十三年に出版された「中日大辞典」の増訂版が発行され、三十一日午後、名古屋市中村区の都ホテルで、出版記念会と中国国歌教育委員会への贈呈式が行われる。旧版の出版から十八年。日々、時代の流れに後れをとる辞典に、「みじめな姿で世間をふらつくわが子のけじめ」をつけようとする言語学者の執念が実った。

増補改訂作業のため、同大学に中日大辞典編纂（さん）処が設けられたのは五十年四月。旧版の編纂委員長で文学部の故・鈴木沢郎教授が編集主任、鈴木教授の教え子で教養部の今泉潤太郎教授（五三）Ⅱ中国語学専攻Ⅱが編集委員長として始まった。編纂処といっても、木造の同大学本館の片隅にあるストーブもない部屋。鈴木教授と今泉教授の二人は旧辞典をばらし、改める個所に書き込みができるよう、一ページずつ、わら半紙に張りつける作業から手をつけた。

時代遅れになるのは辞典の宿命で、鈴木教授は旧版を出した直後から、改訂版の出版を考えていたらしい。作業は日夜続けられ、北京の新聞社「大公報」の元編集委員で、五十五年中国語教員として同大学に赴任した黄異さん（六六）が用語解説に助言するなど、編集者は最も多い時で六人を数えた。彼らが集めた用語で、旧版を張りつけたわら半紙は朱直しで真っ赤になった。

旧版の準備から含めて約三十年間、「中日大辞典」にかかわった今泉教授は、幼いころ、下宿屋だった実家で、上海から引き揚げて愛大に通う元・東亜同文書院の学生が話す中国語に興味を持ち、愛大に進んで鈴木教授に出会った。

その鈴木教授も「辞典を一つ作ると人ひとり、命を落とす」と言われているかのように、五十六年一月、改訂版の完成を待たずに八十二歳で亡くなった。死の間際、今泉教授が病室を見舞った時、鈴木教授の妻しづ江さん（七九）が「辞典は今泉さんが全部やってくれるそうですよ」と語りかけると「うん」と深くうなずいた。「あれは満足感だったんですよ。自分の生んだ子がふらふらとさまよっているのに、きちんとした形でケリをつけたという。それが今、自分で仕事を終えて分かりました」と今泉教授。

大修館書店から発行された増訂版はB6判、二千七百五十六頁。不足していた動、植物の名前や、日本でもなじみになった「万円戸」、科学技術の進歩で「個人電脳（パソコン）」「語音電脳（ワープロ）」の新語も加えられ、旧版より三万語多い約十四万語が収録されている。

三十一日の会合には、「愛大で中国語を学んだ会」の約百人がお祝いに駆けつけるほか、駐日中国大使館参事官の陳彬（チン・ピン）氏ら中国側関係者も出席、一千部が贈られる。

〔注〕朝日新聞 一九八六年四月二八日所載。

18年ぶり増訂版発刊の中日大辞典 出版記念会

愛知大学（本部・豊橋市町畑町、浜田稔学長）は十八年ぶりに中日大辞典増訂版を発刊、三十一日、名古屋市内のホテルで開く出版記念会の席上、中国の教育委員会へ贈呈される。

中日大辞典は、さる四十三年に出版、全国の中国語学習者の高い評価を受け、計七万部印刷された。しかし、この間、中国の発展は急で、「時代にふさわしい辞典を」の要望が大学内外からあり、五十年から同辞典編集委員会（編集委員長・今泉潤太郎同大教授）を発足、増訂版の編集を進めてきた。

増訂版はB6判、二千七百六十五頁。六百頁増え、語いは入れ替えも含め二万語多い十四万語が収録されている。語音電脳（ワープロ）や生物工芸学（バイオテクノロジ）愛姿病（エイズ）などが増訂版で初めて登場した。

今泉編集委員長は「多くの人の協力で、『愛大の中日大辞典』の名に恥じぬ増訂版ができた。日中友好に少しでも役立てばと思う」と話している。定価六千八百円。一万五千部印刷、書店で発売中。

〔注〕 中日新聞 一九八六年五月十一日所載。

愛知大が増訂版 14万語収録の中日大辞典

『百科事典』としても活用

愛知大学（本部・豊橋町畑町、浜田稔学長）はこのほど、中日大辞典の増訂版を発刊した。本格的な中国辞典として四十三年に出版された旧版以来十八年ぶりの集大成で、三十一日には名古屋市中村区の都ホテルで出版記念会と、中国国家教育委員会への増訂版一千部の贈呈式も行われる。

増訂版はB6版大で、二千七百六十五^頁、一万七千部（一部定価六千八百円）を印刷する。

七万部刊行された旧版と比べて、増訂版は三万語多い十四万語が収録されているほか、中国の総合辞典としても役立つよう百科項目はじめスラング、方言などを多用して編さんしたことが特色。収録語類の中では科学技術分野や動植物関係、医学部門を主体に新登場のものも豊富で、「電脳」（コンピュータ）「個人電脳」（パソコン）「愛姿病」（エイズ）「録像機」（ビデオ）「健美舞」（エアロビクス）などがある。中国語学専攻の今泉潤太郎教授（五三）は「日中友好合作、学术交流の所産で増訂版を完成させることができた。中日大辞典が今後の日中交流拡大に役立てば」と話している。

三十一日午後二時から開かれる出版記念会には愛知大の中国語講座を学んだ受講生もお祝いに駆け付ける。また、増訂版の贈呈式では中国側から陳彬駐日中国大使館参事官が出席する。

〔注〕静岡新聞 一九八六年五月三十日所載。